甲賀市文化財報告書　第17集

下川原遺跡第11次･竹石遺跡第1次
発掘調査報告書

２０１１

甲賀市教育委員会

序

滋賀県の東南部に位置する甲賀市は豊かな自然に恵まれ、国指定史跡「紫香楽宮跡」・「垂水頓宮跡」・「甲賀郡中惣遺跡群」などの歴史資産も豊富です。甲賀市には現在、500余りの埋蔵文化財包蔵地が確認されており、その数は県内でも有数です。また、甲賀市は関西圏と中部圏の中間に位置し、新名神高速道路が市内を横断し、今後、市のさらなる発展も期待されています。

文化財は歴史を通して未来の甲賀市を見通すための大切な資産ですが、特に埋蔵文化財は、その地域の歴史をもっとも雄弁に物語る、私たちが共有する財産ということができます。

しかしながら、埋蔵文化財は地中に埋もれていることから、目にする機会が少なく、その内容までを知ることは極めて困難なものです。そのため、埋蔵文化財の内容を知り、これを理解するためには発掘調査が必要となり、そして、その成果を広く公表し、より多くの人たちに活用していただく必要があると考えております。

今回刊行いたしましたこの発掘調査報告書は、国道 1 号拡幅工事による店舗建て替え計画に伴い実施した下川原遺跡第 11 次発掘調査、および、認定こども園建設計画に伴い実施した竹石遺跡第 1 次発掘調査の成果を掲載したものです。

本報告書の内容が当市の歴史を解明する一助となり、調査成果が市民の皆様をはじめ、広く活用されることを切に願っています。

最後になりましたが、本報告書で報告する調査の実施にご協力をいただきました関係機関および関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

平成 23 年（2011 年）3 月

甲賀市教育委員会
教育長　山 本　佳 洋

例　言

1. 本書は甲賀市教育委員会が平成 21 ～ 22 年度に実施した下川原遺跡第 11 次発掘調査と平成 22 年度に実施した竹石遺跡第 1 次発掘調査の調査報告書である。
2. 調査原因は以下の通りである。

下川原遺跡第 11 次発掘調査

滋賀交通株式会社による店舗建て替え計画

竹石遺跡第 1 次発掘調査

学校法人森島学園および社会福祉法人美徳会による認定こども園建設計画

3. 甲賀市教育委員会における調査体制は以下の通りである。

調査主体　甲賀市教育委員会　教育長　國松 嘉仲（平成 21 年度）

甲賀市教育委員会教育長職務代理者　甲賀市教育委員会事務局教育部長　友田 啓視（平成 22 年 4 月～ 7 月）

甲賀市教育委員会　教育長　山本 佳洋（平成 22 年 7 月～平成 23 年 3 月）

調査事務局　甲賀市教育委員会事務局　歴史文化財課

課長　林口 幸治　　課長補佐　大崎 哲人

埋蔵文化財係　係長　鈴木 良章　　主査　小谷 徳彦（調査担当者）

技師　渡部 圭一郎　　主事　西野 久俊（平成 21 年度）

4. 現地調査および整理調査にあたり、下記の方々の協力を得た（敬称略・五十音順）。

（下川原遺跡第 11 次調査）　小川隆之　佐藤美紀　竹内利明　服部あや子　服部撤三　藤本廉裕　松井純子　吉田献

（竹石遺跡第 1 次調査）　小川悦男　小川隆之　佐藤美紀　杉本義弘　平井正義　廣岡輝治　藤中澄子　藤本廉裕　松井純子　松本峰夫　吉治孝

5. 本書の執筆・編集は小谷徳彦が行った。
6. 本書で使用した水準高は東京湾平均海面高度を基準とし、座標については、下川原遺跡第 11 次調査は世界測地系（日本測地系 2000）による平面直角座標第Ⅵ系に基づき、竹石遺跡第 1 次調査は任意の座標を用いている。なお、本書で示す北は、下川原遺跡第 11 次調査が座標北、竹石遺跡第 1 次調査が磁北である。
7. 本書で使用する遺構略号は次のとおりである。

SB：竪穴住居・掘立柱建物　SD：溝状遺構　SK：土壙・土坑　SP：柱穴　SV：谷状遺構　SX：その他遺構

8. 本書で報告した発掘調査で出土した遺物や図面・写真類については、甲賀市教育委員会が保管している。

目　　次

第１章　周辺環境

第１節　地理的環境 …… 1

第２節　歴史的環境 …… 2

第２章　下川原遺跡第 11 次調査

第１節　調査概要 …… 7

第２節　遺跡 …… 9

第３節　遺物 …… 14

第４節　まとめ …… 17

第３章　竹石遺跡第１次調査

第１節　調査概要 …… 19

第２節　遺跡 …… 23

第３節　遺物 …… 30

第４節　まとめ …… 34

挿　　図

第１章　周辺環境

図１　甲賀市の位置

図２　周辺の遺跡分布図　1：50,000

第２章　下川原遺跡第 11 次調査

図３　調査トレンチ位置図　1：2,500

図４　調査区土層断面図　1：80

図５　調査区平面図　1：100

図６　谷状遺構 SV08001 推定範囲　1：500

図７　谷状遺構 SV08001 出土土器　1：3

図８　周辺の調査地と谷状遺構 SV08001　1：3,000

第３章　竹石遺跡第１次調査

図９　調査対象地位置図　1：2,500

図 10　調査トレンチ位置図　1：1,000
図 11　昭和 37 年の調査地周辺の地形　1：7,000
図 12　第 1 トレンチ土層断面図　1：80
図 13　第 2 トレンチ土層断面図　1：80
図 14　遺構平面図　1：250
図 15　竪穴住居 SB0102 1：50
図 16　土坑 SK0116 1：40
図 17　土壙墓 SK0226　1：40
図 18　掘立柱建物 SB0232　1：50
図 19　掘立柱建物 SB0245　1：40
図 20　竪穴住居 SB0102 出土土器　1：3
図 21　土壙墓 SK0226 出土土器　1：3
図 22　その他の出土時　1：3
図 23　時期区分による遺構配置図　1：500

写 真 図 版

第 2 章　下川原遺跡第 11 次調査
PL1　上段　第 1 トレンチ全景（南から）
　　下段　第 1 トレンチ　サブトレ（北から）
PL2　上段　谷状遺構 SV08001 掘削状況
　　下段　第 2 トレンチ全景（北から）
PL3　下川原遺跡第 11 次調査　出土土器
第 3 章　竹石遺跡第 1 次調査
PL4　上段　調査区全景（北から）
　　下段　第 2 トレンチ全景（北から）
PL5　上段　竪穴住居 SB0102
　　下段　竪穴住居 SB0102　竈部分
PL6　上段　掘立柱建物 SB0232
　　下段　掘立柱建物 SB0245
PL7　上段　土壙墓 SK0226
　　下段　土坑 SK0117　土器出土状況
PL8　竹石遺跡第 1 次調査　出土土器①
PL9　竹石遺跡第 1 次調査　出土土器②

第１章　周辺環境

第１節　地理的環境

甲賀市は滋賀県の南端に位置し、東西約 43.8ｋｍ、南北約 26.8ｋｍを測り、面積 481.69ｋ㎡で滋賀県全体の約 12%を占め、県内第 3 位の面積である。市域は、北を大津市・湖南市・日野町、東を三重県鈴鹿市や亀山市、南を三重県伊賀市と京都府相楽郡、西を京都府綴喜郡と接しており、三方を県境とする。琵琶湖に面していない内陸部に位置するが、大阪・名古屋からそれぞれ 100ｋｍ圏内にあり、近畿圏と東海圏を結ぶ役割を果たしている。実際、国道 1 号線が東西に貫き、さらには新名神高速道路も横断している。

市域は東西方向に長い地形で、東側に北から南西方向に連なる標高 1,000m越える鈴鹿山系、南西側に標高 500 ～ 700mの信楽山地がある。この山々に挟まれた地域に古琵琶湖層群の形成する標高 200 ～ 300mの丘陵が広がっている。これらの丘陵は大きく 3 つに分かれ、北から水口丘陵、甲賀丘陵、甲南丘陵と呼ばれている。水口丘陵と甲賀丘陵の間には野洲川が、甲賀丘陵と甲南丘陵の間には杣川が流れ、長い年月の間にそれぞれ両岸に河岸段丘を形成している。また、両河川は市内を北西に向って流れ、市の中央北部にあたる水口町泉付近で合流し、琵琶湖に向かって西流する。この合流付近には沖積低地が広がり、周辺の低位段丘面と合わせて、南北約 3ｋｍ、東西約 5ｋｍの水口盆地を形成し、市内最大の平野部となっている。

これらの河川と並行するように国道 1 号や JR 草津線が走っている。前者は野洲川上流域を東行し、鈴鹿峠を越えて三重県亀山市に通じ、仁和 2（886）年以降の東海道のルートに近い。後者は杣川流域を南東行し、三重県伊賀市に通じ、大津宮時代の東海道である倉

図１　甲賀市の位置

歴（くらぶ）道のルートに近い。また、これらと直交するように、道路では国道307号が通過し、鉄道では貴生川駅を起点として信楽高原鉄道と近江鉄道がそれぞれ南北に走っている。野洲川と杣川の流域は現代に至るまで重要な交通網として位置づけられ、両河川が形成した平坦地を主な居住空間として多様な文化が育まれてきたのである。

本報告書に掲載する下川原遺跡と竹石遺跡はともに水口地域に所在する。

下川原遺跡は、甲賀市水口町泉に所在し、甲賀市の中央北部、水口盆地の西端に位置する。野洲川を挟んだ西側は湖南市になる。遺跡は野洲川北岸の低位2次段丘面上に立地し、現在の国道1号線の北側に広がっている。遺跡の北側は水口丘陵となり、非常に安定した地勢である。野洲川と杣川の合流点に近く、すぐ近くには横田の渡し跡がある。西から水口盆地へ入る玄関口に位置していると言える。

竹石遺跡は、甲賀市水口町三大寺に所在し、甲賀市の中央部に位置する。杣川が甲賀丘陵と甲南丘陵の間から水口盆地へ流れ出る付近にあたり、杣川左岸の中位段丘上、段丘の先端付近に立地する。西側に飯道山がそびえ、東から南側にかけて甲南丘陵が広がる。北側には水口盆地を一望でき、非常に見晴らしが良い。河川から一段高い河岸段丘の上で、緩やかに傾斜した広い平坦地が確保できる環境は集落の立地条件として適していると考えられる。

第2節　歴史的環境

琵琶湖に面しない内陸部に位置する甲賀市には、土山・甲賀・甲南地域の山麓部周辺を中心に縄文時代の遺跡が点在する。最古の資料は草創期の有舌先頭器で、土山町の野上野遺跡や甲南町の新治地先から出土した。また、早期の押型文土器が油日遺跡（甲賀町）から出土し、早期後葉の茅山下層式土器や前期前葉の羽島下層式土器、中期後葉の北白川C式土器などが寺山遺跡（甲南町）から出土している。山麓部の遺跡からは縄文土器や石器などの遺物が出土する傾向があり、縄文時代の遺跡は今後も増加すると考えられる。

弥生時代末から古墳時代初頭の遺跡としては、土山町の山女原遺跡や鈴鹿峠遺跡があり、どちらも鈴鹿山麓の稜線に程近い位置に立地する。山女原遺跡からは伊勢湾沿岸部に分布するS字口縁甕が出土しており、鈴鹿山脈を越えての交流がうかがえる。

しかし、現在、縄文時代から弥生時代の遺跡は水口地域では確認されておらず、水口町泉に所在する泉古墳群の造営が水口地域の歴史の始まりとなり、これを契機に甲賀の古墳時代が幕を開ける。

泉古墳群は水口丘陵の西端部に位置する。西罐子塚古墳と東罐子塚古墳の2基が現存し、滋賀県指定史跡となっているが、他に3基の小円墳があったと言われている。

西罐子塚古墳は、水口丘陵の小さな尾根の先端部を利用して築造された直径50m、高さ5.2mの円墳で、2段築成の円丘部に幅20m、長さ10m、高さ2.5mの造り出しが付属する。発掘調査

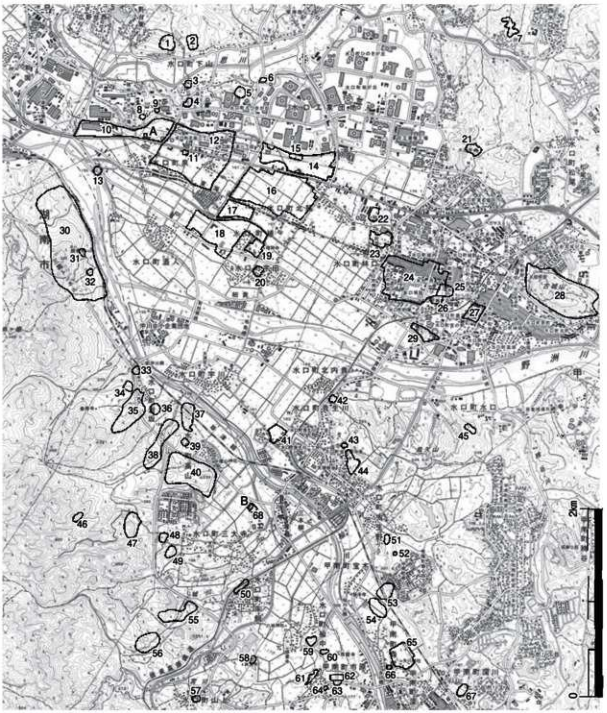


図2　周辺の遺跡分布図　1：50,000

1 澤山城遺跡　2 下山北城遺跡　3 伴屋敷城遺跡　4 下山城遺跡　5 西迎山城遺跡　6 東迎山城遺跡　7 山村城遺跡　8 西縫子塚古墳　9 東縫子塚古墳　10 下川原遺跡　11 塚越古墳　12 北泉遺跡　13 旧東海道横田渡跡　14 北脇遺跡　15 北脇城遺跡　16 北脇南遺跡　17 花池遺跡　18 植遺跡　19 植城遺跡　20 山中氏屋敷遺跡　21 大池寺遺跡　22 柏木神社遺跡　23 西林口遺跡　24 水口城遺跡　25 美濃部出屋敷遺跡　26 富川屋敷遺跡　27 古御殿遺跡　28 水口岡山城遺跡　29 城南遺跡　30 圓覺山古墳群　31 圓覺寺遺跡　32 三雲寺遺跡　33 岩坂古墳群　34 平子城遺跡　35 岩坂南古墳群　36 源太屋敷城遺跡　37 御姫屋敷城遺跡　38 百合野古墳群　39 高山屋敷遺跡　40 高山古墳群　41 貴生川遺跡　42 内貴城遺跡　43 落シ谷遺跡　44 北虫生野城遺跡　45 北内貴城遺跡　46 奥百合野古墳群　47 三大寺落し谷古墳群　48 小山城遺跡　49 奥谷城遺跡　50 牛飼城遺跡　51 虫生野堂の前城遺跡　52 森尻古墳　53 八里寺遺跡　54 楓ノ木遺跡　55 城川古墳群　56 三大寺桜ノ馬場古墳群　57 山上城遺跡　58 東光寺遺跡　59 柚中場遺跡　60 古屋敷館遺跡　61 市原廃寺　62 橋詰遺跡　63 市原城遺跡　64 市原Ⅱ城遺跡　65 矢川寺遺跡　66 森尻屋敷遺跡　67 深川城遺跡

は行われていないが、墳丘の斜面には川原石を用いた葺石を施し、墳頂部や段築のテラスには埴輪を樹立した可能性が高い。墳丘の中心部には大きな盗掘坑があり、木棺直葬と推測されている。採集された埴輪から5世紀前半頃の築造と考えられている。

東纏子塚古墳は、西纏子塚古墳の東約 100mに尾根の先端を利用して築かれた円墳である。直径42m、高さ5.5m。墳丘頂部に盗掘坑があり、西纏子塚古墳と同じく木棺直葬と考えられている。現状では、埴輪や葺石は確認されていない。

5世紀中頃になると、東纏子塚古墳の東約 500mの平野部に塚越古墳が築造される。昭和36年に土取りのために削られ、その際に内行花文鏡・碧玉製勾玉・四方白金銅装眉庇付冑・三角板皮綴短甲・三角板鋲留短甲・頸甲・鉄刀および鉄剣・鉄鏃が出土し、古墳時代中期の典型的な副葬品の組み合わせであることが判明している。また、平成13年には国道1号の拡幅工事に伴って発掘調査が実施され、一辺 52mの方墳で、南辺を除く 3 方向に周濠を巡らせていることがわかった。墳丘の高さは周濠の底から 6.5mである。2 段築成で、墳丘斜面には葺石を施し、墳頂部には埴輪をめぐらせていた。埴輪には家形や盾形などの形象埴輪も含まれていた。

これらの古墳が築造された時期に大規模な集落遺跡も現れる。植遺跡である。平成13～14年にかけて発掘調査が行われ、竪穴住居119棟、掘立柱建物17棟、甕棺墓4基などが検出された。掘立柱建物の中には5世紀中頃の大型倉庫建物が3棟含まれ、その大きさは全国的に見ても巨大である。ヤマト王権との深い関わりを窺わせる。また、5 世紀後半になると、大型倉庫建物は廃絶するが、鍛冶関係の遺物が確認できるようになる。手工業生産を行っていたとみられる。さらに、須恵器を生産していた泉古窯跡との関連性も注目される。

植遺跡では6世紀以降も活発に竪穴住居が営まれているが、6世紀中頃から後半にかけて大きな変化を迎える。大型住居建物や棟持柱をもつ高床建物などが現れ、柵で区画された祭祀空間も形成されて、豪族居館の様相を備える。

泉古窯跡は発掘調査が行われていないが、出土した須恵器の分析から5世紀末～6世紀初頭にかけて操業し、陶邑古窯跡群から工人が移動してきたことが推測されている。泉古窯跡で生産された須恵器は植遺跡や近隣の集落や古墳などに供給されていたと考えられる。

塚越古墳以降の古墳の築造は小規模な円墳で構成される群集墳が中心となり、泉古墳群の対岸にあたる柚川南岸の丘陵に横穴式石室をもつ古墳が数多く造られるようになる。北から園養山古墳群、岩坂古墳群、岩坂南古墳群、百合野古墳群、奥百合野古墳群、高山古墳群、三大寺落し谷古墳群、城川古墳群、三大寺桜ノ馬場古墳群などである。これらの古墳群を総称して「甲賀群集墳」と呼んでいる。甲賀群集墳は現状で 286 基の古墳が確認されているが、400 基近い数になると考えられており、6 世紀前半から 7 世紀中頃にかけて築造されている。一部に渡来系氏族との関係が考えられるものも含まれている。また、植遺跡との関係性も指摘されている。

7 世紀になると、植遺跡が衰退して甲賀群集墳の造営も終了する。水口盆地における古墳時代の終焉と言える。7 世紀前半には植遺跡の北西 1.3ｋｍに下川原遺跡が出現し、7 世紀前半から 8 世紀にかけての集落が営まれた。過去の発掘調査では 50 棟以上の竪穴住居や数棟の掘立柱建物

が確認された。また、13 世紀の遺構も検出されており、中世の集落の存在も窺わせる。

下川原遺跡の東側には北泉遺跡が隣接している。詳細な調査は実施されていないが、試掘調査では 8 世紀中頃～後半の須恵器などが出土し、竪穴住居と考えられる遺構も検出されている。

9 世紀～ 10 世紀には北泉遺跡の東側に北脇遺跡が出現する。北脇遺跡第 4 次調査では鉄製品の工房跡と考えられる掘立柱建物などが検出された。第 5 次・第 7 次調査では 10 世紀中頃の近江産の緑釉陶器が数多く出土した。また、第 5 次調査で青銅製の印鑑も出土している。北脇遺跡の性格についてはまだ不明な点も多いが、これまでの調査で確認された遺構や遺物の状況から一般的な集落遺跡とは異なる性格を持っていることが想定される。

11 世紀以降の水口地域の遺跡の状況は、今の段階では発掘調査の件数が少ないため、十分に把握できているとは言えないが、中世になると、「柏木郷」という名が文献資料の中に現れる。水口町柏木周辺がその地に当たると考えられている。嘉承元年（1106 年）9 月 25 日に刑部丞源義光（新羅三郎義光）が柏木郷と山村郷の私領を摂関家と園城寺金光院に寄進したとされる（『園城寺伝記』・『平安遺文』40・41）。

長寛 3 年（1165 年）には「柏木御厨」が伊勢外宮領として置かれ、文治 3 年（1187 年）に宣旨されているが、その後、嘉禄 2 年（1226 年）に山中中丞俊信が鈴鹿山賊を討伐した功績により柏木荘を領し、宇田に居住したとある。これ以降、山中氏がこの地に居住したようである。「柏木御厨」の正確な位置については不明であるが、山中家文書には 15 世紀の中頃まで「御厨」関連の史料があること、御厨保司職を代々、山中氏が受け継ぐことになっていること、山中氏の居館が宇田山中と言われていたことなどから、現在の柏木神社から宇田集落一帯が「柏木御厨」であったと推測されている。

山中氏は天正 13 年（1585 年）に豊臣秀吉の命により元の領地である山中村（現在の甲賀市土山町山中）に戻されるが、植城遺跡では 16 世紀代の堀などが確認されており、天正 13 年までの山中氏の屋敷地と推定されている。

このように、古墳時代から中世にかけて水口盆地の西半地域が重要な位置を占め、人々の活動の中心であったことがわかる。しかし、天正 13 年に豊臣秀吉が家臣の中村一氏に命じて水口岡山城が築城させると、中心は水口盆地の東半地域に移ることになった。関ヶ原の戦い後、幕府の直轄領となり、3 代将軍徳川義光の時に上洛の際の宿館として水口城を築かれ、東海道の宿場町としてさらに繁栄することとなった。

《参考文献》

甲賀市史編さん委員会編 2008『甲賀市史』第 1 巻　甲賀の古代　甲賀市

甲賀市史編さん委員会編 2010『甲賀市史』第 7 巻　甲賀の城　甲賀市

甲賀市教育委員会編 2008『甲賀の横穴式石室－後期古墳群調査報告－』甲賀市史編纂叢書第四集　甲賀市教育委員会

甲賀市教育委員会編 2009『下川原遺跡発掘調査報告書』甲賀市文化財報告書第 13 集　甲賀市教育委員会

甲賀市教育委員会・国際航業株式会社編 2006『下川原遺跡発掘調査報告書－滋賀県甲賀市水口町　所在－』甲賀市文化財報告書第 7 集　甲賀市教育委員会

甲賀市教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会編 2008『北脇遺跡発掘調査報告書』甲賀市文化財報告書第 9 集　甲賀市教育委員会

甲賀市教育委員会編 2010『北脇遺跡第 12 次・下川原遺跡第 10 次発掘調査報告書』甲賀市文化財報告書第 15 集　甲賀市教育委員会

甲賀市教育委員会編 2008『北脇遺跡・西林口遺跡　発掘調査報告書』甲賀市文化財報告書第 12 集　甲賀市教育委員会

滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会編 2005『植遺跡　甲賀市水口町』ほ場整備関係（経営体育成整備）遺跡調査報告書 32-2　滋賀県教育委員会

滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会編 2004『泉塚越古墳』国道 1 号線水口道路改築工事に伴う発掘調査報告書　滋賀県教育委員会

丸山竜平 1977「甲賀郡水口町泉所在の古墳群」『滋賀文化財だより』8 （財）滋賀県文化財保護協会

畑中英二 1995「滋賀県甲賀郡水口町泉古窯採集遺物の検討（前編）－古墳時代須恵器の地域色の発現について－」『滋賀文化財だより』216 （財）滋賀県文化財保護協会

畑中英二 1995「滋賀県甲賀郡水口町泉古窯採集遺物の検討（中編）－古墳時代須恵器の地域色の発現について－」『滋賀文化財だより』217 （財）滋賀県文化財保護協会

畑中英二 1996「滋賀県甲賀郡水口町泉古窯採集遺物の検討（後編）－古墳時代須恵器の地域色の発現について－」『滋賀文化財だより』226 （財）滋賀県文化財保護協会

第２章　下川原遺跡第 11 次調査

第１節　調査概要

第１節　調査経緯

国道 1 号の拡幅工事に伴い HondaCars 甲賀中央・水口店の店舗建て替え工事が計画された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「下川原遺跡」の範囲内にあたり、周辺地の既調査状況から当該地においても遺構の存在が想定され、建設工事によって遺構が破壊されるおそれがあるため、事業主と協議を重ねた結果、地下遺構に影響がおよぶと考えられる範囲を対象として本発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、甲賀市教育委員会が調査主体となり、平成22年1月25日から現地調査に着手した。調査面積は当初、建築面積である 364.3 ㎡を対象としたが、調査開始直後に調査範囲内に土管が埋設されていることがわかり、調査の実施できない範囲が出てきた。そのため、調査範囲を 158 ㎡に縮小した。現地調査は平成 22 年 2 月 8 日に完了した。

出土遺物の整理調査および報告書の刊行作業は、現地調査終了後に着手し、平成 23 年 3 月 22 日に終了した。

第２節　調査日誌

1.25　調査機材を搬入し、基準点測量を実施。また、同日、重機掘削を開始。重機掘削を開始後すぐに調査対象範囲のほぼ中央に既設の土管が埋まっていることが判明した。すでに使用されていない土管であったが、土管が完存している状態で取り外すことが困難であった。そのため、土管の埋設範囲を調査区域から除外することとした。

1.26　重機による掘削で遺構面深度が想定よりも深いことが判明する。

1.27　湧水が激しいため、調査区内に排水溝を掘削し、排水作業に着手する。同時に壁面精査を実施。

1.28　遺構面がさらに下層であることがわかったため、再び重機による掘削を行う。

1.29　前日の夜に降った雨の影響で調査区内に水が溜まったため、1 日かけて排水作業を実施。

2.1　排水溝の再掘削を行い、調査区の壁面精査を再び実施した。

2.2　前日に引き続き、排水溝を掘削した。また、平面精査に着手した。

2.3　当初、集落の南限となる谷状遺構 SV08001 の北側掘形が検出できると想定していたが、調査区全体が SV08001 の中であることが判明した。調査区内の湧水がかなり激しく、全面で SV08001 の埋土を掘り下げることが非常に困難で、調査区の深さも約 2mに達していたため、全面での掘削を断念し、サブトレを設定して一部で SV08001 の掘削を行うこととした。SV08001 は上層と下層の 2 層に区分できることがわかった。掘削終了後、写真撮影を行った。

2.4　平面図、土層図を作成し、レベル測定も行った。図面作成後、1 トレを埋め戻した。

2.5　2 トレを調査。1 トレ同様、調査区全体が SV08001 の中であることがわかった。写真撮影、図面作成を行行い、2 トレを埋め戻した。

2.8　現場の撤収作業、後片付けを行い、現地調査を終了した。

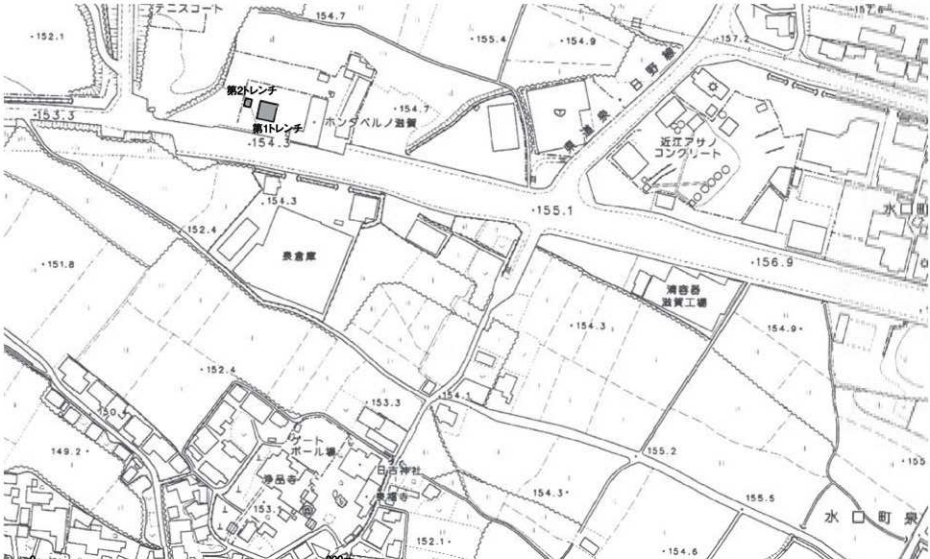


図３　調査トレンチ位置図　１：2,500

第２節　遺　　跡

第１項　調査地周辺地形

調査地は水口盆地北西部に位置し、下川原遺跡の中央部付近にあたる国道１号に隣接した場所である。北側の丘陵上には東・西罐子塚古墳がある。周辺地では近年、開発事業にかかる発掘調査を数回実施している。今回の調査地の東側では第8次発掘調査(平成19年)、第10次発掘調査(平成 20 年)、西側では第２次発掘調査（平成 17 年）を実施している。第２次調査では７世紀を中心とする竪穴住居が約 50 棟確認され、第８次調査では数多くの土坑から 12 ～ 13 世紀の瓦器が多く出土した。また、第 10 次調査では６世紀後半とみられる竪穴住居などが確認されている。

今回の調査では、第８次・第 10 次調査の結果から調査区内に集落の南限となる谷状地形の北側掘形が検出されると想定され、下川原遺跡の南端部の様相を明らかにする成果が得られると期待された。

調査区の規模は、第１トレンチが南北 13m× 東西 11m、第２トレンチが南北 5m× 東西 3mである。調査面積は合計で 158 ㎡であった。

第２項　基本層序（第４図）

上から①舗装面（アスファルト)、②砕石層、③淡青灰色粘質土（土壌改良層)、④淡青灰褐色砂質土（造成時盛土)、⑤暗灰色粘質土（旧水田床土)、⑥暗灰褐色粘質土（谷状遺構 SV08001 上層)、⑦暗褐色粘質土（谷状遺構 SV08001 下層)、⑧黄灰色粘質土（ベース）である。周辺地の発掘調査では⑦層の上面で遺構を検出しているが、今回の調査では調査区が谷状遺構 SV08001 の中に入ってしまい、⑧層は SV08001 の底となっていた。また、谷状遺構 SV08001 の埋土は上層（⑥層）と下層（⑦層）に分かれていた。

調査区南端では⑧層を切るように灰色砂礫層が堆積しており、その下は青灰色シルト層で地山となっていた。国道１号の下まで⑧層が延びていないことが確認された。

また、調査区内での湧水が激しく、調査時には排水作業が困難であった。第８次調査の際も谷状遺構 SV08001 の底面付近からは湧水があり、今回の調査区と同じような状況がみられた。

第３項　遺　　構

谷状遺構 SV08001　今回の調査地から東に約 65mの地点を調査した第８次調査で検出した谷状遺構である。第８次調査で谷の北端を検出し、幅 4m以上であることが判明している。埋土の状況や堆積状況から考えて、今回の調査区は谷状遺構 SV08001 の中に収まってしまうと考えられる。

埋土は上層と下層に分かれ、上層が暗灰褐色粘質土で厚さ 20 ～ 30 ㎝、下層が暗褐色粘質土で厚さ10～15㎝であった。上層からは瓦器、土師皿、陶器などが出土し、下層からは須恵器、土師器、緑釉陶器などが出土した。SV08001 の底面は黄灰色粘質土となっており、そこからかなり激し

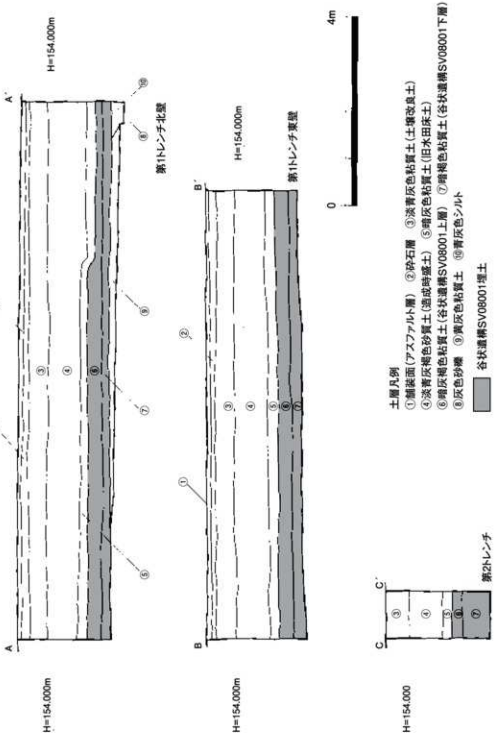


図4　調査区土層断面図　1：80

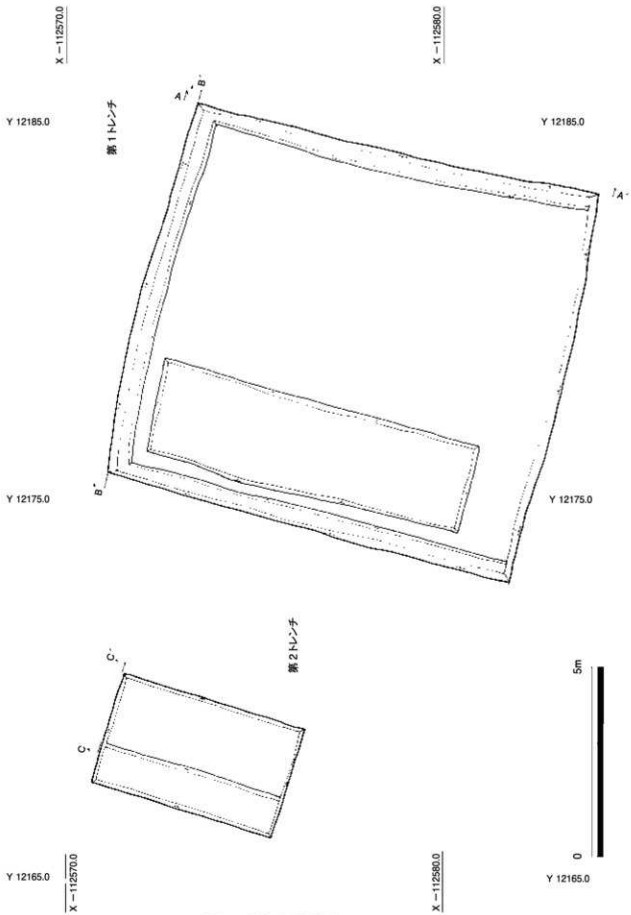


図5　調査区平面図　1：100

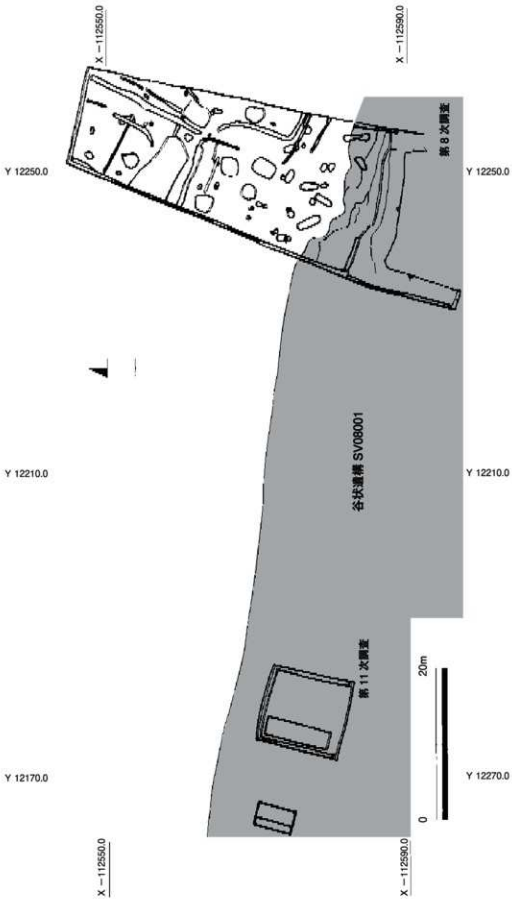


図6　谷状遺構 SV08001 推定範囲　1：500

い湧水がみられた。

SV08001 は埋土の堆積状況から考えて、大きく 2 時期に分けられる。上層からは 13 世紀から 14 世紀後半にかけての遺物が出土し、下層からは 6 世紀から 10 世紀後半にかけての遺物が出土した。

遺構の方位は、東西方向で北に 6°傾いており、現在の国道 1 号とほぼ並行すると推定できる。また、南側の掘形は確認できていないが、遺構の幅は 15m以上あると想定される。

第 2 次調査によると、下川原遺跡の集落は 7 世紀を中心とする集落である。また、第 8 次調査では 13 世紀の土坑などがみつかっており、中世の集落の存在も窺える。

谷状遺構 SV08001 は第 8 次調査、第 10 次調査の調査成果から下川原遺跡の集落範囲を示していると考えられている。今回の調査での検出状況を考えても谷状遺構 SV08001 が集落の範囲を限るものとみてまず間違いない。もともと存在していた谷地形を集落の範囲を限る溝として利用していたと推測される。また、調査区内での湧水の激しさを考慮すると、谷状遺構 SV08001 にはある程度の水量が常時流れていたと推察される。

さらに、今回の調査で谷状遺構 SV08001 が上層と下層に分かれ、それぞれ 6 世紀から 10 世紀後半、13 世紀から 14 世紀後半にかけての遺物を含んでいる状況が判明した。上記に述べたように、第 2 次調査では古代の集落がみつかっており、第 8 次調査では中世の集落の存在が推定されている。谷状遺構 SV08001 の堆積状況は、この集落のあり方と符合している。したがって、過去の調査成果と今回の調査成果を考慮すると、SV08001 は古代の集落の範囲を限る溝でもあり、中世の集落の範囲を限る溝でもあったと考えられる。

第３節　遺　　物

本節で報告する遺物は、すべて谷状遺構 SV08001 から出土したものである。

須恵器

杯Ｈ蓋（1）　口径 10.2 ㎝。天井は比較的高く丸みをもつとみられる。口縁部は天井部からわずかに外反して伸びる。口縁端部は丸みをもつ。口縁部と井部の境には鈍い稜がめぐられている。天井部下半には波状文が施されている。天井部から口縁部にかけてナデで丁寧に調整されている。焼成は硬質で青灰色を呈す。6 世紀前半。

杯Ｂ（2・3）　高台付の須恵器の杯身。3 は口径 22.9 ㎝、高台径 15.0 ㎝、器高 5.3 ㎝を測る。4 は高台径 9.0 ㎝である。底部から斜め上方へ立ち上がる体部で、底部と体部の屈曲する辺りにやや外側に踏ん張る高台を貼り付けている。底部外面はヘラ切りの後、ヘラケズリで調整している。また部分的にナデ調整も加えている。体部外面下半部をヘラケズリで調整しているが、それ以外は内外面ともにナデ調整である。焼成は硬質で灰色ないし青灰色を呈す。8 世紀後半。

壺（13）　口径 13.6 ㎝。頸部から口縁部に向かい外反して外側に開く。口縁端部は下方に玉縁状にふくらんで段をなし、口縁端部が厚くなる。口縁端部の断面は方形である。調整はナデ調整。焼成は硬質で暗青灰色を呈す。一部に自然釉がみられる。

長頸壺（17）　口頸基部は細く外湾して上外方に伸び、口縁端部付近でわずかに外反する。端部は丸く仕上げられている。口頸部の上から１／３付近に２本の平行した沈線が施されている。体部上半は球体をなすとみられ、おそらく平底で高台をもつものと思われる。調整はナデ調整。焼成は硬質で灰色を呈す。8 世紀中頃。

土師器

羽釜（14・15）　15 は口径 24.0 ㎝。口縁部は内頃し、口縁外面に鍔を貼り付ける。鍔はやや丸みをもつ。調整は 14・15 ともに外面がナデ調整であるが、14 の内面には横方向のハケ目が確認できる。15 の内面はナデ調整である。13 世紀前半。

鉢（16）　口径 19.5 ㎝。口縁部はわずかに内頃し、口縁端部はやや平たい。全体の器形は鉄鉢形になると考えられる。口縁端部から幅 1.5 ㎝ほどを横方向のナデで調整しており、口縁部を意識したものと考えられる。それ以外は内外面ともに横方向のハケ目と斜め方向のハケ目が確認でき、横方向のハケ目の後に斜め方向のハケ目が施されている。同様の器種は第 10 次調査で確認された竪穴住居 SB0117 から出土している。6 世紀後半。

緑釉陶器椀（4・5）　4 は口径 13.8 ㎝。体部がやや内湾気味に斜めに立ち上がり、口縁端部が外側に屈曲する特徴をもつ。5 は口径 16.9 ㎝、高台径 6.0 ㎝、器高 5.1 ㎝を測る。体部は底部から斜め外側にまっすぐ伸び、4 と比較して口縁に向かって外側に開く傾向にある。口縁端部は 4 と同じく外側に屈曲する。高台は近江系緑釉陶器の特徴である貼り付けの有段輪高台である。底部外面を丁寧にナデ調整しているため、糸切りの痕跡は確認できない。また、体部の内外面ともにミガキまたはナデで丁寧に調整されている。釉薬の塗布はみられず、須恵質の素地である。10 世紀後半。

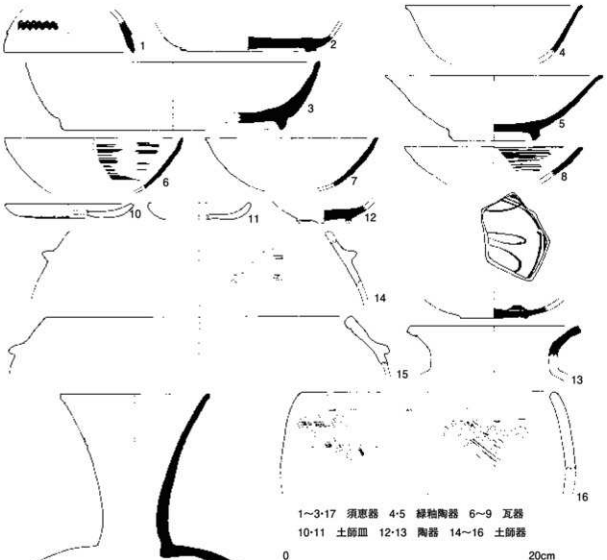


図７　谷状遺構 SV08001 埋土出土土器　1：3

瓦器（6 ～ 9）　口径 13.5 ～ 14.0 cm。体部が底部から内湾気味に立ち上がるもの（6・7）と斜め上方へ伸び、体部の途中で屈曲するもの（8）があるが、ともに胴が張る形状である。いずれも口縁端部は内側に沈線をめぐらす特徴もつ。6 と 8 には内面に黒色層が残り、細かい丁寧なミガキが確認できる。また、底部と体部の境には断面が三角形の低い高台がつき、底部内面には連結輪状の見込みが確認できる（9）。器形などの特徴から近江型に属す。13 世紀後半。

土師皿（10･11）　10は口径10.0㎝、器高1.1㎝、11は口径8.0㎝、器高1.35㎝を測る。手づくね成形で、口縁端部が丸くなる。底部外面および体部下半部をヘラケズリ調整しており、ユビオサエの明瞭な痕跡は確認できない。体部上半部と内面はナデ調整である。やや軟質で黄灰色を呈す。14 世紀後半。

陶器椀(12)　椀の底部と思われる破片。高台は切り欠き部をもつ低い輪高台である。高台径4.3㎝。内外面はミガキによって丁寧に調整され、高台の内側と底部外面以外には透明釉が施されている。焼成は硬質で淡灰白色を呈す。

第４節　まとめ

今回の調査では建物などの遺構は確認できなかったが、谷状遺構 SV08001 の範囲が推定できたことや、谷状遺構 SV08001 の堆積のあり方が判明したことは大きな成果であった。

これまでの下川原遺跡の発掘調査では、第 2 次調査と第 10 次調査で確認された 6 世紀後半から 8 世紀にかけての竪穴住居や掘立柱建物で構成される集落と、第 8 次調査と第 10 次調査で確認された 13 世紀の土坑や掘立柱建物で構成される集落があり、大きく 2 時期の集落が存在することが想定されてきた。

今回の調査で谷状遺構 SV08001 が上層と下層の大きく 2 時期に区分できると判明し、出土遺物の状況から上層はおよそ 13 ～ 14 世紀、下層は 10 世紀後半以前と大別できる。SV08001 は上層と下層の 2 時期で埋没し、14 世紀後半の土師皿が出土していることから考えると、最終的に埋没したのは 14 世紀後半であると推測される。この状況は、今まで想定されていた 2 時期の集落の存在と合致しており、谷状遺構 SV08001 が古代の集落と中世の集落の両者において集落の範囲を限る溝の役目を果たしていたと考えることができる。もともと存在していた谷地形を上手く利用して集落を形成していたと言えよう。

ただし、13 世紀の集落については現段階では様相がはっきりと分かっていない。第 2 次調査で遺跡西半部の状況はおよそ明らかにされたが、その後の調査は今回も含めて遺跡縁辺部での調査である。遺跡東半部の主要な部分については判らない部分が多い。

図８　周辺地の調査と谷状遺構 SV08001　1：3,000

平成 18 年度に遺跡東半部の中央地域で試掘調査を行った。この調査では竪穴住居や多くのピット、土坑などを確認している。試掘調査で調査区も小規模なトレンチであり、遺構の有無を確認することを主眼としていたため、詳細な状況は明らかにできなかった。しかし、遺構の濃密な分布状況から判断して、遺跡西半部と比較しても遜色ない集落が広がっていると推定している。

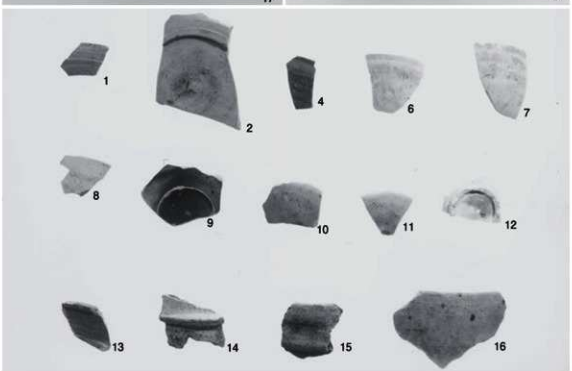
今後、この地域に対しても詳細な発掘調査が行われ、下川原遺跡の全容が解明されることを期待したい。

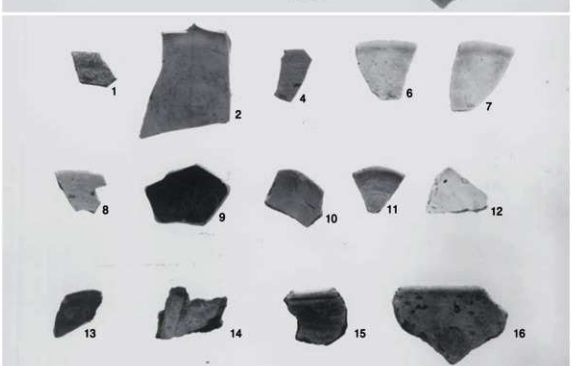
第1トレンチ全景（南から）

第1トレンチ　サブトレンチ（北から）

谷状遺構SV08001掘削状況

第2トレンチ全景（北から）





下川原遺跡第11次　出土土器

第３章　竹石遺跡第１次調査

第１節　調査概要

第１項　調査経緯

学校法人森島学園ならびに社会福祉法人美徳会による認定こども園の建設計画に伴い、当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、開発面積が 1,000 ㎡を超えることから、平成 22 年５月 20 日から平成 22 年５月 22 日にかけて甲賀市教育委員会で試掘調査を実施した。その結果、竪穴住居と掘立柱建物を確認し、今まで知られていなかった遺跡の存在が明らかになった。その後、両者の間で協議を行い、地下遺構に影響を及ぼすと考えられる範囲について本発掘調査を実施することとなった。なお、遺跡の名称は周辺の小字名から「竹石遺跡」とした。

発掘調査は、市教育委員会を調査主体として平成 22 年６月 30 日より 500 ㎡を調査対象範囲として実施した。現地調査を平成 22 年６月 30 日から平成 22 年７月 31 日にかけて行い、整理調査および発掘調査報告書刊行作業を現地調査終了後から平成 23 年３月 22 日まで行った。

第２項　現地調査日誌

6.30　調査機材などを搬入し、発掘調査の準備を行う。また、調査区内に溜まった雨水の排水作業を実施した。

7.1　前日に引き続き、排水溝の掘削などを行った。翌日以降に本格的な調査が実施できるようになった。

7.2　第１トレンチの精査を開始した。トレンチの中央部付近で竪穴住居 SB0102 を検出した。

7.5　竪穴住居 SB0102 を切る水田暗渠 SD0103 を掘削。SB0102 の掘削にも取りかかる。

7.6　前日に引き続き、SB0102 を掘削。SB0102 と重複する SK0106 も掘削した。

7.7　SX0107、SP0108、SD0109、SP0110 を掘削。１トレの壁面精査を行い、土層図の作成を始める。

7.8　SP0111 などを掘削。第２トレンチに排水溝を掘削。西壁面を精査し、土層図の作成を開始する。

7.9　SK0113、SD0114 を掘削。１トレの地区割り作業を実施した。１トレ土層図が完成。

7.10　SB0102、SK0113、SP0115、SK0116 を掘削。SB0102 内にカマド跡を検出した。２トレ西壁面土層図が完成。

7.15　前日の雨によって調査区内に溜まった雨水の排水作業を実施した。

7.16　SP0117、SX0118 を掘削。SP0117 から土師皿が出土した。

7.17　SB0102 を掘削し、断面図を作成した。また、SX0118 のほか多くのピットや土坑などを掘削した。

7.20　１トレの地区割り作業が完了。平面図の実測準備にかかる。また、２トレ北壁面の精査を行った。

7.21　２トレの遺構検出を開始。また、１トレ遺構平面図と２トレ北壁面土層図の作成も始めた。

7.22　２トレで多くのピットなどを確認した。２トレ北壁面土層図が完成。

7.23　掘立柱建物 SB0232 と掘立柱建物 SB0245 を確認する。１トレ遺構平面図が完成。

7.25　土壙墓 SK0226 を検出し、掘削。

7.26　２トレ全景、SB0232、SB0246、SK0226 の写真撮影。また、１トレのレベル測定を実施。

7.27　１トレの写真撮影準備にかかる。２トレの地区割りを行い、遺構平面図の作成を始める。

7.28　１トレ全景、SB0102 などの写真撮影。２トレ平面図が完成、レベル測定を実施。各遺構の断面図も作成。

7.29　SB0102 と SK0226 の断面確認用の畦を掘削し、完掘状況の写真を撮影する。

7.30　テントの解体など撤収の準備を行う。また、調査基準点に標高を入れるため、レベル移動を実施した。

7.31　調査機材などを撤収し、現地調査が完了した。

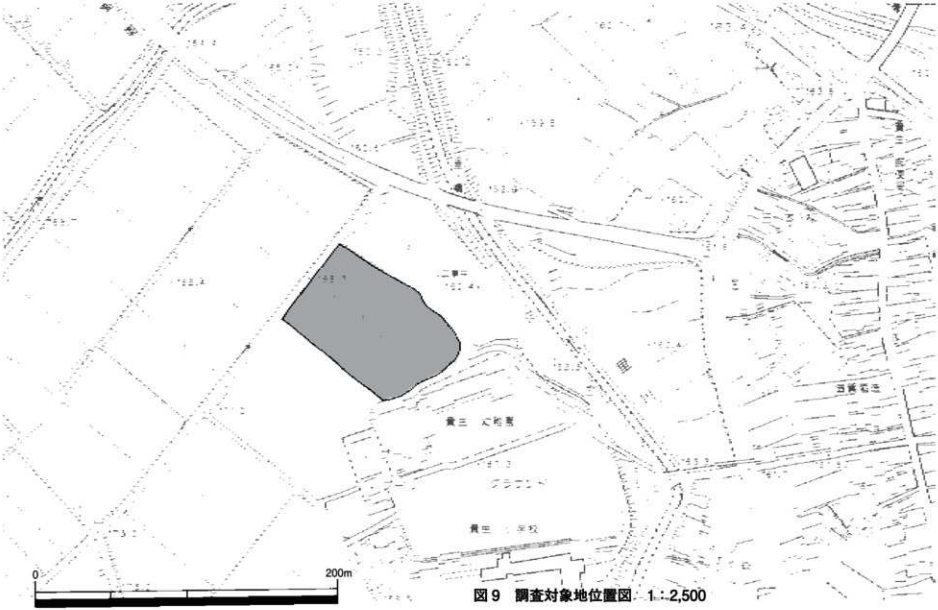


図９　調査対象地位置図　1：2,500

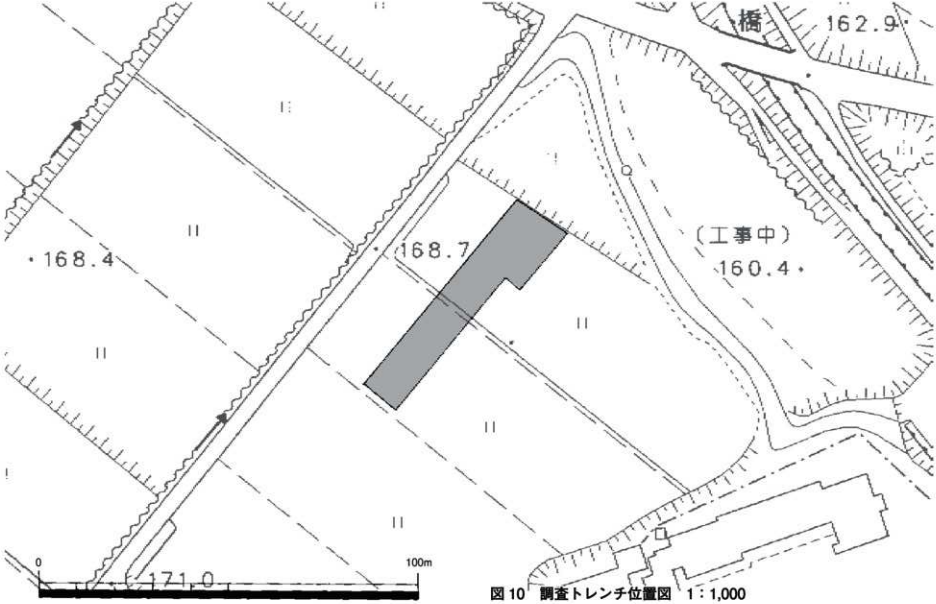


図 10　調査トレンチ位置図　1：1,000

図 11　昭和 37 年の調査地周辺　1：7,000

第２節　遺　　跡

第１項　調査経緯

調査地は、杣川が甲賀丘陵と甲南丘陵の間から水口盆地へ流れ出る付近にあたり、杣川左岸の中位段丘上、段丘の先端付近に立地する。西側に飯道山がそびえ、東から南側にかけて甲南丘陵が広がる。北側には水口盆地を一望できる。河川から一段高い河岸段丘の上で、緩やかに傾斜した広い平坦地が確保できる環境は集落の立地条件として適していると考えられる。

調査地周辺は昭和40～50年代にほ場整備が行われており、北から南へ傾斜する地形に一面水田が広がっている。ほ場整備が行われる以前の地形図を見る（図11）と、ほ場整備以前から付近一帯は水田地帯であり、かなり広い平坦地が広がっていたことがわかる。水田の広がる南側と西側には飯道山などの山々が迫り、北側と東側は段丘崖となっている。段丘崖の下側との比高差は約3mであり、調査地は段丘の先端に立地していると言える。

第２項　基本層序（図 12・13）

第１トレンチ　上から①耕作土、②床土、③粗砂混じり褐色粘質土（ほ場整備時盛土）、④黄灰色粘質土（遺構検出面）である。③層はトレンチ南端から約 6.5m付近より北側で確認でき、それよりも南側では確認できず、ほ場整備の施工状況を反映していると考えられる。

遺構は④層の上面ですべて検出しており、遺構面は１層のみであった。遺構検出面の標高は167.6 ～ 167.9mで、南から北に向かって低くなっている。

トレンチの南端から約 3m付近までは黄灰色粗砂層が厚く堆積し、④層を確認することはできなかった。また、トレンチの北端から約 3m付近までほぼほ場整備時の撹乱である暗青灰褐色粘質土層が深く、④層を確認することはできなかった。つまり、第１トレンチでは遺構面である④層

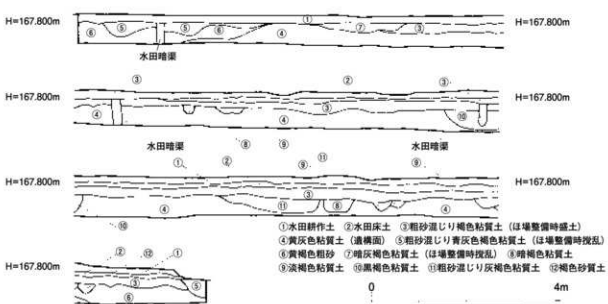


図 12　第１トレンチ土層断面図　1：80

はトレンチの南北両端では確認することができなかった。

暗渠は、すべて床土の上面から掘削されており、ほ場整備時に施工されたものであった。現在の水田の方向と同じ向きであることからも明らかである。暗渠は幅 15 ～ 20 cm、深さ 40 ～ 50 cm であった。

第２トレンチ　上から①耕作土、②床土、③粗砂混じり褐色粘質土（ほ場整備時盛土）、④黄灰色粘質土（遺構検出面）で、第１トレンチと同様の基本層序であった。第２トレンチでも③層はトレンチ南端から約 10m付近まで確認することはできなかった。第１トレンチと同様にほ場整備の施工状況を反映していると考えられる。

遺構は第１トレンチ同様、④層の上面ですべて検出しており、遺構面は１層であった。遺面検出面の標高は 168.6 ～ 168.3mで南から北に向かって低くなっている。

暗渠も第１トレンチと同じようにすべて床土の上面から掘削され、現在の水田の方向に揃うものであった。幅 20 cm前後、深さ 40 cm以上で細く深い溝であった。

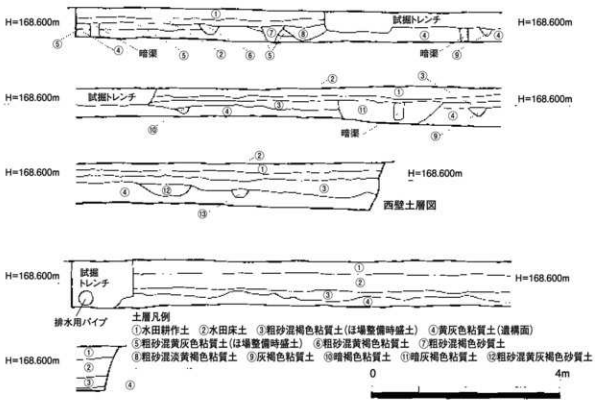


図 13　第２トレンチ土層断面図　1：80

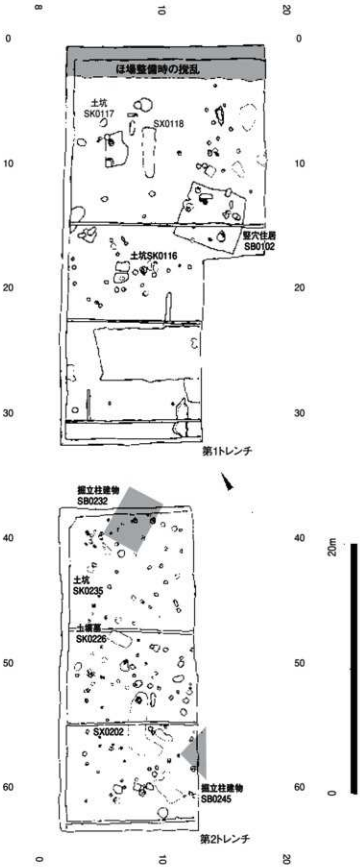


図14　遺構平面図　1：250

第３項　遺　　構

今回の調査では、竪穴住居1基、掘立柱建物2棟、土壙墓1基のほか、多くのピットや土坑状の遺構を検出した。しかし、遺物を含まない遺構も多く、また、ピットの数が非常に多いわりには建物としてまとまるものも少なかった。したがって、検出した遺構のうち、性格が明瞭な遺構および出土遺物から時期がはっきりと判る遺構のみを記述することとする。

第1トレンチ

竪穴住居SB0102（図15）

平面プランと住居の構造　第1トレンチ中央部東側で検出した竪穴住居。長軸5.05m×短軸4.65m

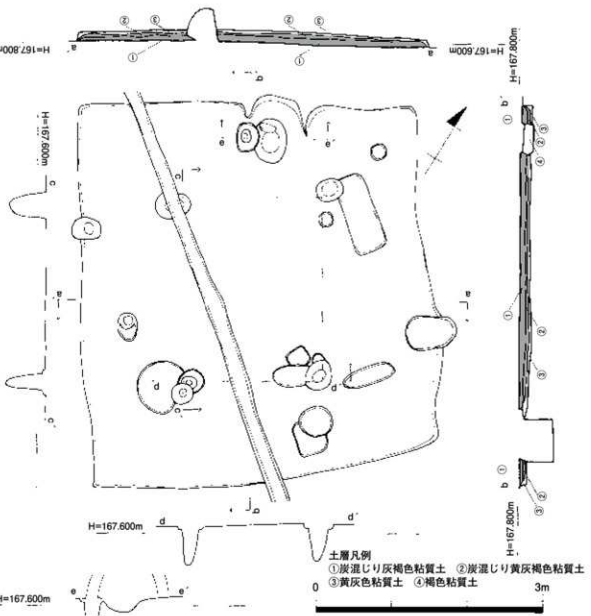


図 15　竪穴住居 SB0102　1：50

の平面プランで床面積が約23.5㎡である。遺構の方位は北で32°西へ振る。遺構の深さは検出面から10～15㎝で、残存状況はあまり良くない。

住居の対角線上に主柱とみられる柱穴が4つある。主柱間の距離は、桁行が2.5m、梁行が2.0m。住居の平面プランに対しておよそ1／2の規模となる。柱穴の深さは床面から50～60㎝である。4本の主柱で上屋部を支える伏屋式の竪穴住居であると推定される。

埋土は2層に分かれ、上層が炭混じり灰褐色粘質土、下層が炭混じり黄灰褐色粘質土である。下層の下は遺構ベース面である黄灰色粘質土となっており、明瞭な貼り床の痕跡を確認することはできなかった。おそらく、地山を床面として利用していたとみられる。

竪穴住居の埋土からは土師器と須恵器（図20）が出土し、6世紀前半の遺構と考えられる。

竈　住居北西辺のほぼ中央に竈の痕跡を残している。煙道が屋外にまで延びる痕跡は認められず、屋内に煙出しを有するタイプと考えられる。袖の残存状況は悪く、痕跡程度に確認できるのみであるが、粘土で形成していると推測される。竈の規模は残存する状況で幅85㎝、奥行き約1mである。竈の中央部に45㎝×60㎝の楕円状の焼土面がある。焼土は5㎝ほどの厚さで堆積していた。また、焼土の上に20㎝×10㎝ほどの直方体に近い石が横たわった状態で出土しており、煮炊きをする際に土器を支えた支脚石である可能性が高い。支脚石の近くでは土師器の甕が出土した。竈で使用されたものと推測されるが、原位置を留めた状態での出土ではなかった。

土坑SK0106　第1トレンチ中央部東側、竪穴住居SB0102と重複するように検出した土坑。遺構の規模は長軸60㎝×短軸40㎝で、平面形態は楕円形である。竪穴住居SB0102と重複し、SB0102の北東辺の一部を切っている。深さは検出面から約20㎝。埋土は灰褐色粘質土で、遺構内から須恵器の平瓶（図22－20）が出土している。

土坑SK0116（図16）　第1トレンチ中央部やや南側で検出した方形の土坑。遺構の規模は一辺が約40㎝で、正方形に近い形状である。検出面からの深さは25㎝。埋土は褐色粘質土の1層のみで、一気に埋没している。埋土から小型の手捏土器（図22－24）が出土している。

図 16　土坑 SK0116　1：40

土坑SK0117（PL7）　第1トレンチ北西部で検出した小土坑。遺構の規模は長軸70㎝×短軸50㎝で、平面形態はやや不整形な楕円形である。深さは検出面から約15㎝。遺構内から完形の土師皿（図22－23）が出土している。

SX0118　第1トレンチ北部で検出した溝状の遺構。長さ4.3m、最大幅1mの細長い形状である。埋土は褐色粘質土で、深さは検出面から10～15㎝。埋土から須恵器の蓋（図22－11）が出土して

いる。

第2トレンチ

土壙墓SK0226（図17）　第2トレンチ中央部で検出した長方形の遺構。長軸1.8m×短軸1.0m、平面規模が約1.8㎡である。遺構の主軸は北で25°西へ振る方位を取る。検出面からの深さは約50㎝。埋土は、上から①粗砂混じり黄灰褐色粘質土、②粗砂混じり黄灰色粘質土、③灰褐色粘質土、④黄色ブロック混じり灰褐色粘質土、⑤黄褐色粘質土、⑥淡褐色粘質土に分かれ、粗砂混じりの①・②層（上層）、灰褐色系の③・④層（中層）、褐色系の⑤・⑥層（下層）に区分できる。埋土からは13世紀の瓦器（図21－10）が出土している。

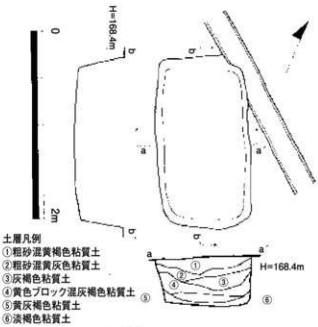


図 17　土壙墓 SK0226　1：40

遺構内からは瓦器などの土器の破片以外の出土はなく、副葬品と考えられる遺物や人骨、そのほか祭祀の痕跡などを明確に示すものは確認できなかった。しかし、遺構の規模と形状から土壙墓とみて間違いないと考える。おそらく屋敷墓であったのだろう。

掘立柱建物SB0232（図18）　第2トレンチ北端部で検出した掘立柱建物。梁行2間×桁行3間以上の建物で、梁行が3.2m、柱間1.6m、桁行が3.7m以上、柱間1.5mである。桁行3間目より先はトレンチ外となるため、桁行の正確な規模は不明である。遺構の主軸は北で25°西に振る方位を取る。

建物の柱掘形は直径30cm前後の円形ないし一辺が30～40cmの小型の隅丸方形で、一部に楕円形になるものもある。柱痕跡を残すものが多く、建物解体時には柱を抜き取らずに切断したと考えられる。柱穴の深さは検出面から20cmと浅

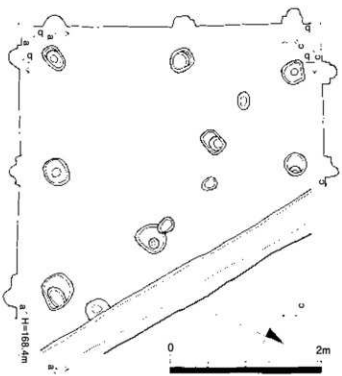


図 18　掘立柱建物 SB0232　1：50

く、残存状況はあまり良くない。

柱穴から出土している遺物はわずかで小破片ばかりであるが、瓦器の破片が含まれており、13世紀後半の建物と推定される。

掘立柱建物SB0245（図19）　第2トレンチ南東部で検出した掘立柱建物。調査区内で確認したのは1間以上×1間以上で、それ以外はトレンチ外となる。建物の角部のみの検出であるため、梁行と桁行を明確に判断することができない。柱間は2.1m。遺構の方位は北で12°西に振る。

建物の柱掘形は不整形な円形または楕円形である。規模は30～50cm。柱痕跡を残す。SB0232と同様に建物解体時には柱を切断したものと考えられる。柱穴の深さは検出面から20～25cmと浅く、残存状況はあまり良くない。

柱穴から出土している遺物は、SB0232と同じように量が少なく、小破片ばかりである。出土した土器の中には瓦器の破片が含まれており、13世紀後半の建物と考えられる。建物の時期はSB0232と同時期と推定される。

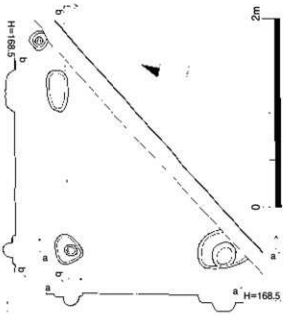


図 19　掘立柱建物 SB0245　1：40

土坑SK0235　第2トレンチ北西部で検出した土坑。掘立柱建物SB0232から南西約2mに位置する。遺構の規模は一辺が約1mで、平面形態は不整形な方形である。深さは検出面から60cm。遺構内から手捏土器（図22－25）が出土している。

SX0202　第2トレンチ南部で検出したL字形の溝状の遺構。幅は80cm、長さは長辺で3.5m、短編で1.5mである。深さは15～20cm。埋土は褐色粘質土であった。埋土から出土した遺物は小破片ばかりで図化できるものはなかったが、須恵器と土師器のみであった。

第３節　遺　　物

第１項　竪穴住居 SB0102 出土土器（図 20）

1・2 は須恵器杯 H 蓋である。口径は 1 が 10.9 ㎝、2 が 13.9 ㎝。両者ともやや丸みのある天井部をもつ。口縁部は 1 がやや内頃するのに対し、2 はやや外反して下に伸び、口縁端部が内頃する。また、2 は口縁端部内側に段がめぐる特徴がある。天井部と口縁部の境の稜は両者とも鈍いが、1 はとりわけ鈍く、痕跡的に残る程度である。天井部はヘラケズリ調整が施され、口縁部から内面にかけてはナデ調整である。焼成は硬質で青灰色を呈す。

3 は土師器高杯の脚部である。杯部は剥離して残っていない。古墳時代通有のハの字に広がる形状をなす。脚部の付け根で直径 3.0 ㎝。内外面ともにナデによって調整されている。焼成はやや軟質で赤灰色を呈す。

4 は土師器鍋もしくは甑の把手の破片である。把手のみ本体から隔離しているため、鍋と甑を判断するのは難しい。表面が磨耗しているが、ナデ調整によって成形されていると思われる。把手の長さは推定で約 5.0 ㎝。やや軟質の焼成で赤灰色を呈す。

5･6 は土師器甕。5 は口縁部の破片で、6 は底部である。5 は口縁部がくの字に取り付く形状で、口縁部はまっすぐ外側に開いている。胴部が残っていないため、形状はよくわからないが、球体に近いと推測される。口径は 15.8 ㎝を測る。口縁部と胴部の境付近に斜め方向のハケ目が確認できる。おそらく、胴部はハケ目で調整されていると考えられる。また、口縁部から内面にかけてはナデで丁寧に調整されている。口縁部と胴部の境にわずかだが、ススが付着している。

6 は丸みのある底部で、胴部が球体の形状になると推測される。5 と同様の器形であろう。調整は内外面ともにナデ調整である。

竪穴住居 SB0102 から出土した遺物のうち、1 と 2 の須恵器杯 H 蓋は天井部と口縁部の境の稜が鈍い傾向をもち、1 については口縁端部を丸くおさめている。これらの特徴は水口盆地で最大の古墳時代の集落である植遺跡のⅡ期新段階とされる須恵器の特徴に近く、MT15 に平行する時期と考えられる。また、土師器についても植遺跡のⅡ期新段階とされているものに類似する。したがって、竪穴住居 SB0102 から出土した土器は 6 世紀前半の製品である考えられる。

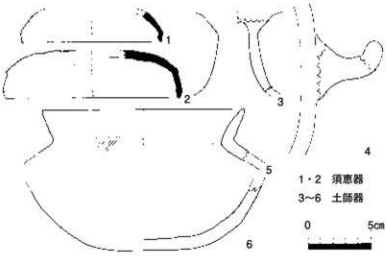


図 20　竪穴住居 SB0102 出土土器　1：3

第２項　土壙墓 SK0226 出土土器（図 21）

7 は須恵器杯 B 蓋。天井の両端からわずかな部分の内側に短いかえりが付く。かえりは痕跡的にみられる程度である。口縁端部は丸くおさまる。口径14.0㎝。天井部はヘラケズリで調整され、口縁部から内面はナデ調整である。7 世紀後半か。

8 は須恵器杯 H 身。口径 13.0 ㎝。たちあがりが短く内頃し、端部は丸い。底部は底が浅く、扁平になるとみられる。調整は、底部がヘラケズリで、受け部から内面にかけてナデ調整である。陶邑窯における中村編年でⅡ型式５段階とされる例に似ている。6 世紀末。

9 は須恵器甕。体部に対し、くの字に屈曲して口縁部が取り付く。体部外面には細かな格子叩き目の痕跡が残り、内面には同心円当て具の痕跡が残る。また、体部外面に自然釉がみられる。くびれ部で直径 13.8 ㎝を測る。

10 は瓦器椀。体部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁端部の内側には沈線がめぐっている。口径は 15.0 ㎝。内外面ともに黒色層がよく残り、平行の細いミガキが多く施されている様子がよくわかる。13 世紀前半。

土壙墓 SK0226 からは古墳時代の須恵器が少量出土しているが、大半は瓦器や土師皿であり、図化できるものが少なかった。それらの瓦器や土師皿は 13 世紀の製品の特徴をもっている。

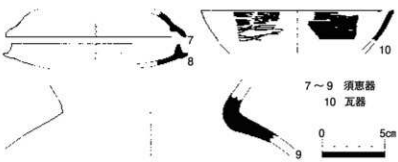


図 21　土壙墓 SK0226 出土土器　1：3

第３項　その他の出土土器（図 22）

須恵器

杯H蓋（11～15）　天井が比較的高く丸みをもつ。口縁部は天井の両端から外反して下がり、口縁端部に内頃する段をなす。天井と口縁部の境の稜は鈍い。口径14.3㎝を測る（15）。調整は、天井部がヘラケズリで、口縁部と内面はナデである。焼成は硬質で青灰色を呈す。一部に断面セピアになるものもある。11はSX0118から出土。

杯H身（16・17）　底部が比較的深く丸みをもつ形状をなす。口径は、16が12.1㎝、17が11.7㎝。器高は4.7㎝（17）。たちあがりは内頃して上方に伸び、口縁端部がわずかに外反する。端部の内側は内頃する段をなす。受け部は短く、断面三角形を呈す。底部外面1／2に回転ヘラケズリを施す。焼成は硬質で青灰色を呈す。

杯B蓋（18）　口径12.3㎝。器高2.9㎝。天井は比較的高く丸みがある。口縁部は一度外側に広がってから斜め下方へ折れ曲がる。かえりはない。つまみの有無は不明である。調整は、天井部がヘラケズリで、口縁部および内面はナデ調整である。焼成は硬質で青灰色を呈す。

杯A身（19）　底部の直径が8.4㎝。体部は平らな底部から斜め上方へまっすぐ伸びる。底部外面

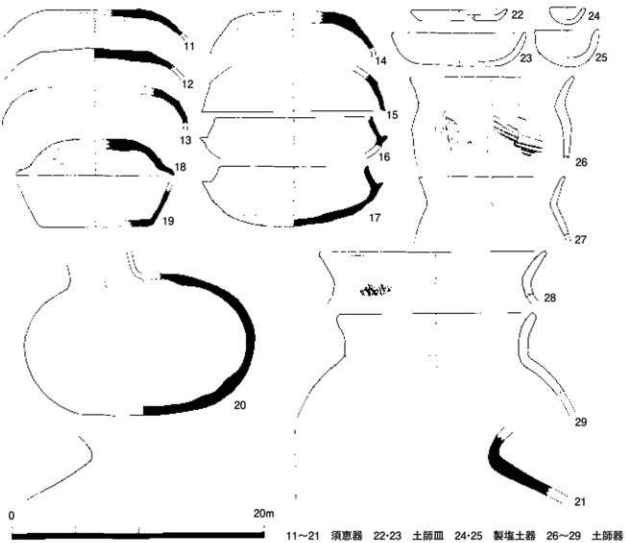
にはヘラ切りの後、回転ヘラケズリが施されている。体部はナデで丁寧に調整され、器壁が薄く作られている。焼成は硬質で灰色を呈す。

平瓶（20）　楕円球形の胴部をもつ。口頸部は欠損してしまっている。胴部の最大径が18.6cm、胴部の高さが11.8cmを測る。胴部の内外面ともに丁寧にナデで調整されている。焼成は硬質で灰色を呈す。一部に自然釉がみられる。土坑SK0106出土。

甕（21）大型の甕。くびれ部の直径が31.8cmを測る。体部に対し、くの字に屈曲して口縁部が取り付く。体部外面には細かな格子叩き目の痕跡が残り、内面には同心円当て具の痕跡が残る。また、体部外面に自然釉がみられる。

土師皿（22・23）　小型で浅いタイプ（22）と深身のタイプ（23）がある。22は口径7.5cm、器高0.9cm。手づくねで成形されており、底部から斜めにまっすぐ口縁部が立ち上がる。底部は平らである。全体をナデで調整している。

23は口径10.5cm、器高2.6cm。22と比較して深身で大型の製品である。体部は底部から丸みをもって立ち上がり、口縁部は斜めにまっすぐ伸びる。口縁端部は丸い。内面は平滑である。明瞭



11～21　須恵器　22･23　土師皿　24･25　製塩土器　26～29　土師器

図22　その他の出土土器　1：3

な木目痕跡は確認できないが、内型つくり的手法によって成形されたものと考えられる。

両者ともに13世紀後半から14世紀初頭の製品である。23は土坑SK0117出土。

手捏土器（24・25）　丸底で単純な椀型の形状をなす小型土師器。手づくねで成形されている。24は口径2.8cm、器高1.3cmと非常に小型の製品である。器壁も薄い。25は口径5.0cm、器高2.9cm。小型の土器ではあるが、24と比較すると大きく、器壁も厚みがある。これらの手捏土器は、植遺跡の出土品に類例があり、古墳時代の土器である。24は土坑SK0116、25は土坑SK0235出土。

土師器甕（26～29）　胴部が長胴形をなすとみられるタイプ（26・27）と球体形をなすとみられるタイプ（28・29）に分けられる。

26・27は、胴部から緩やかに屈曲して口縁部にいたる。口縁端部は、つまみ気味で丸くおさめる。両者とも外面は縦方向のハケ目で調整する。27は内面にもハケ目が確認でき、横方向である。口径は、26が12.8cm、27が11.4cmを測る。

28は、胴部からやや直立気味に口縁部が立ち上がり、口縁端部が外反する。口縁端部は丸くおさまる。調整は内外面ともにナデで仕上げられている。口径15.5cm。

29は、胴部からくの字状に屈曲して口縁部が取り付く。口縁端部はややつまみ上げる傾向にある。胴部外面に縦方向のハケ目を確認できる。口縁部から内面にかけてはナデ調整である。口径17.7cmを測る。

土師器甕はいずれも類似したタイプが植遺跡で出土しており、いずれも古墳時代の製品である。また、27と29は竪穴住居SB0102に重複する水田暗渠から出土したもので、竪穴住居SB0102に由来する可能性が高い。

第４節　まとめ

第１項　遺構の時期区分

本調査で検出した遺構の方位および出土遺物の種類・年代をまとめると、下記の表のようになる。

遺構名	出土遺物	遺物からみた遺構の年代	グループ
竪穴住居 SB0102	須恵器杯 H、土師器高杯・鍋・甕	6 世紀前半	①
土坑 SK0106	須恵器平瓶	6 世紀後半か？	
土坑 SK0116	手捏土器	古墳時代	①
土坑 SK0117	土師皿	13 世紀後半～ 14 世紀初頭	②
SX0118	須恵器杯 H	5 世紀末～ 6 世紀初頭	①
土壙墓 SK0226	須恵器杯 B 蓋・杯 H・甕・瓦器椀	13 世紀後半	②
掘立柱建物 SB0232	瓦器	13 世紀	②
掘立柱建物 SB0245	瓦器	13 世紀	②
土坑 SK0235	手捏土器	古墳時代	①
SX0202	須恵器・土師器	古墳時代	①

上記の表で各遺構から出土した遺物の年代から遺構の年代を整理すると、大きく分けて2つの時期に区分できる。1つは5世紀末から6世紀前半の古墳時代中期の遺構（①のグループ）で、もう1つは13世紀の鎌倉時代前半の遺構（②のグループ）である。ただし、土坑SK0106の年代がほかの遺構と異なるが、土坑SX0106は竪穴住居SB0102を切って掘られているので、SB0102より新しい年代であることは間違いないことから、今回はグルーピングから外すこととする。

①と②のグループの遺構をそれぞれ図示したのが図23である。これを見ると、①の遺構は調査区全体に分布しているのに対して、②の遺構は第2トレンチ側に集中している。図13の遺構平面図をみても、第2トレンチ側に小規模の柱穴を多数あるのが分かる。これらの柱穴のうち多くのものは瓦器の破片を含んでおり、おそらく掘立柱建物SB0232・SB0245と同じ時期の柱穴だと考えられる。図23の遺構分布状況や小規模の柱穴の検出状況を考慮すると、②の遺構は調査地の南側に集中していると言える。

一方、①の遺構は調査地全体に分布している。今回の調査では竪穴住居は1棟しか確認できなかったが、後述するように古墳時代の遺物が調査地全域から数多く出土している状況を考えると、竪穴住居SB0102と同時代の住居跡が広範囲に分布している可能性が高い。

また、奈良時代や平安時代の遺物はわずかに出土する程度で、人々が濃密に生活していた痕跡をうかがうことは難しい。したがって、今回の調査で検出した遺構の年代と遺構の広がりから、

調査地周辺には古墳時代の集落と鎌倉時代の集落が存在していたと考えられる。また、奈良時代や平安時代などでは人々が濃密に生活している状況ではなかったと推定される。

さらに、鎌倉時代の遺構が調査地の南半部に集中している状況は、鎌倉時代の集落の中心が南側にあることを物語っている。現在の三大寺の集落が水田地帯の南側に立地していることからみても非常に興味深い傾向を示している。

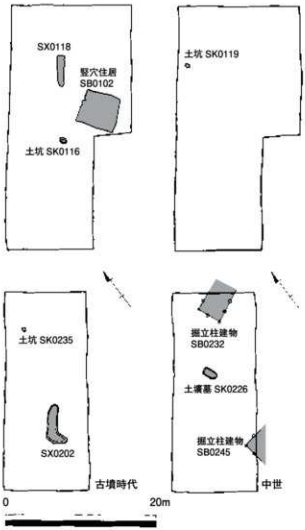


図 23　時期区分による遺構配置　1：500

第２項　出土遺物

本調査では5世紀末から14世紀初頭にかけての遺物が出土したが、それらを時期ごとのまとまりにすると、5世紀初頭から6世紀前半と13世紀後半から14世紀初頭にかけてピークがある。その他の時期の遺物の割合は少ない。

遺構内からも多くの遺物が出土しているが、ほ場整備時の盛土層からも遺物が出土しており、それらの中には古墳時代の遺物が多く含まれている（図22－12～18・26・29）。

前項で述べたように、古墳時代の遺構は調査区の全域に分布しており、広範囲な集落の存在を窺わせる。ほ場整備時の盛土から古墳時代の遺物が多く出土する状況は、集落の存在を想起させる傍証となるであろう。

第３項　まとめ

以上のように今回の調査では大きく2時期の遺構を確認することができ、2つの時代で集落が形成されていたことがわかった。

さらに、古墳時代の遺物がほ場整備時の盛土層からも出土することから、広範囲にわたって集落が展開していたことが推察された。

遺構の残存状況があまり良好ではなかったが、多くの成果を上げることができた。惜しむらくはほ場整備によって大きく撹乱を受けてしまったことである。ほ場整備前に本遺跡が発見されていれば、もっと大きな成果が得られたのではないだろうか。しかし、ほ場整備が完了した現段階においても地下には竪穴住居や掘立柱建物などの遺構が残り、当時の集落の痕跡が確実に残っている。

今後、周辺地の調査が進展すれば、集落の範囲や規模などが明らかになり、遺跡の全容が解明されていくだろう。今後の発掘調査に期待したい。

調査区全景（北から）　手前　第1トレンチ　奥　第2トレンチ

第2トレンチ全景（北から）

竪穴住居SB0102　人の立っているところが主柱の位置

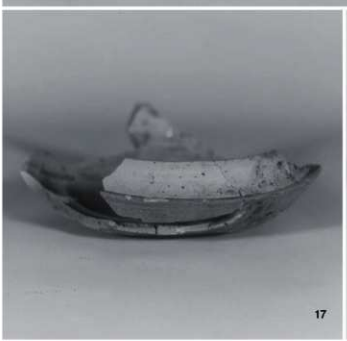
竪穴住居SB0102　竈部分

掘立柱建物SB0232

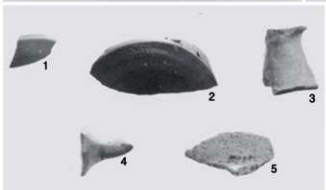
掘立柱建物SB0245

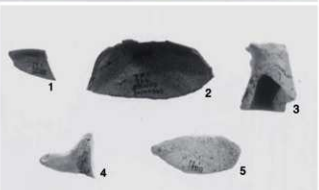
土壙墓SK0226

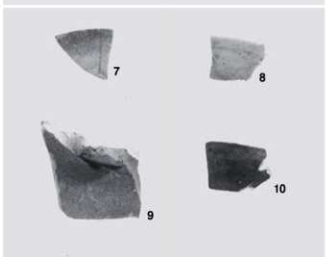
土坑SK0117 土器出土状況

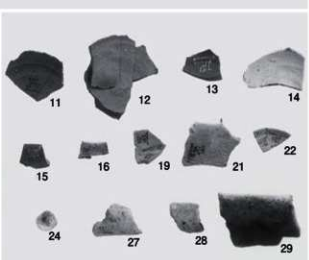


竹石遺跡第1次調査　出土土器①









竹石遺跡第1次調査　出土土器②

報告書抄録

ふりがな	しもがわらいせきだいじゅういちじ・たけいしいせきだいいちじ はっくつちょうさほうこくしょ
書名	下川原遺跡第11次・竹石遺跡第1次 発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	甲賀市文化財報告書
シリーズ番号	第17集
編著者名	小谷徳彦
編集機関	甲賀市教育委員会
所在地	滋賀県甲賀市甲南町野田810番地
発行年月日	平成23年(2011年)3月22日

所収遺跡(ふりがな)	所在地(ふりがな)	コード		世界測地系		調査面積(㎡)	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
下川原遺跡(しもがわらいせき)	甲賀市水口町泉(こうかし みなくちちょう いずみ)	25209	363-116	34°59′6″	136°7′58″	150	2010.1.25～2010.2.8	店舗建設
竹石遺跡(たけいしいせき)	甲賀市水口町三大寺(こうかし みなくちちょう さんだいじ)	25209	363-127	34°57′0″	136°8′44″	500	2010.6.29～2010.7.31	認定こども園建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下川原遺跡	集落	古墳～中世	谷状遺構	土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、土師皿	
竹石遺跡	集落	古墳～中世	竪穴住居、掘立柱建物、土壙墓	土師器、須恵器、瓦器	

甲賀市文化財報告書第17集

下川原遺跡第11次･竹石遺跡第1次 発掘調査報告書

印刷・発行　2011年3月22日
編集・発行　甲賀市教育委員会
滋賀県甲賀市甲南町野田810番地
TEL　０７４８－８６－８０２６
FAX　０７４８－８６－８２１６
印　　刷　村田印刷株式会社